

# 第11講座 古文(1)

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

猪の子あまた居たる中に、ある猪の子、「<sup>\*1</sup>総の司とならん。」と思ひて、目をいからし、尾を振つてとびめぐる。しかれども、<sup>\*2</sup>傍輩らこれを敬はず。「さらば。」と思ひて、羊の並み居たる中に行きて、<sup>①</sup>前のごとく振る舞ひければ、羊恐れて逃げ隠れぬ。さてこの猪望みを達して居たるところに、狼一匹走り来たりけり。「あはや。」とは思へども、「我は司なれば、<sup>②</sup>かれも定めて恐れん。」と思ひて居たるところに、狼とばかり、耳をくはへて山中に至りぬ。□助けず。をめき叫び行くほどに、かの猪の傍輩この声を聞きつけて、つひに力を合はせて助けにけり。されば、もとの猪らに謝りけり。<sup>③</sup>

\*1 総の司 総司令官。総大将。

\*2 傍輩 仲間。

(『伊曾保物語』)

5

問一 線a「敬はず」、b「をめき」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a \_\_\_\_\_ b \_\_\_\_\_

問二 線①「前のごとく振る舞ひければ」とありますが、どう振る舞ったのですか。それが書かれている部分を古文中から十七字で書き抜きなさい。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

問三 線②「かれも定めて恐れん」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「かれ」とは、だれ(何)のことですか。古文中から書き抜きなさい。

\_\_\_\_\_

(2) 「定めて恐れん」の現代語訳として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア きつと恐れるだろう。

イ 少しは恐れるだろう。

ウ 決して恐れることはない。

エ もしかしたら恐れるかもしれない。

問四 □にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 猪の子      イ 猪の傍輩

ウ 羊      エ 狼

問五 線③「謝りけり」とありますが、なぜ猪の子は謝ったのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 自分が最も強いと思っていたのに、狼のほうが強かったから。

イ 自分は猪の総大将なのに、仲間の猪を助けられなかったから。

ウ 羊の総大将にもらったのに、羊たちを救えなかったから。

エ 自分が思い上がった態度を取ったにもかかわらず、仲間の猪たちが助けてくれたから。

\_\_\_\_\_

## 2

次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、山越<sup>やまこえ</sup>の里に老人ありけるが、年ごとに老いて、そのうへ<sup>a</sup>、いみじ<sup>①</sup>う重き病に臥<sup>ふ</sup>し、頼み<sup>②たの</sup>み少なくなりけるに、ただ、この谷の桜に先立ちて、花をも見ずして死なんことのみを嘆<sup>なげ</sup>きて、「いまひとたび花を見て死なば、うき世に思ひ残<sup>b</sup>すこともあらじ」など、せちに聞こえければ、<sup>③</sup><sup>\*1</sup>その子悲しみ嘆きて、この桜の木の下に行きて、「なにとぞ、わが父の死にたまはざる前に花を咲かせたまはれ」と心をつくして天地に祈<sup>いの</sup>り願ひけるに、その孝心、鬼神<sup>\*2きしん</sup>も感じたまひけん。一夜の間に花咲き乱れ、あたかも三月の頃のごとくなりける。この祈りける日、正月十六日なりけるとぞ。

(橋南谿『西遊記』)

\*1 せちに聞こえければ 〓 ひたすら言うので。

\*2 鬼神 〓 天地万物の靈魂や神々。

### 問一

線 a 「そのうへ」、b 「思ひ残す」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a \_\_\_\_\_ b \_\_\_\_\_

### 問二

線①「いみじう」の意味として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア ひどく      イ 悲しく  
ウ 情けなく      エ すばらしく

\_\_\_\_\_

### 問三

線②「頼み少なくなりける」とは、どういうことですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア お金が少なくなってしまうということ。  
イ 診<sup>み</sup>てくれる医者もいなくなったということ。

ウ 働くことができなくなったということ。

エ 病気が治る見込み<sup>みこ</sup>みが少なくなったということ。

\_\_\_\_\_

### 問四

線③「せちに聞こえければ」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) だが、だれに言ったのですか。

\_\_\_\_\_ が \_\_\_\_\_ に。

(2) どんなことを言ったのですか。言った言葉を古文中から探し、それを現代語に直して書きなさい。

\_\_\_\_\_

### 問五

線④「その子悲しみ嘆きて」の部分で省略されている言葉は何ですか。ひらがな一字で書きなさい。

\_\_\_\_\_

### 問六

線⑤「天地に祈り願ひける」とありますが、子供はなぜ天地に祈ったのですか。次の \_\_\_\_\_ a 〓 c にあてはまる言葉を、a は二字、b・c は一字でそれぞれ書きなさい。

この時はまだ \_\_\_\_\_ a \_\_\_\_\_ で、 \_\_\_\_\_ b \_\_\_\_\_ が咲くまでには間があり、それまで父親の \_\_\_\_\_ c \_\_\_\_\_ はもたないだろうと思われたから。

a \_\_\_\_\_ b \_\_\_\_\_ c \_\_\_\_\_

### 問七

この文章の主題を端的に表している言葉を、古文中から二字で書き抜きなさい。

\_\_\_\_\_

## 練習問題

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、伊勢国より近江国へ超えける若き男、三人ありけり。<sup>\*1</sup>下衆なれども、三人ながら心猛く思量ありけり。鈴鹿の山を通りけるに、その山中に、昔よりいかに言ひ始めけるにかありけむ、鬼ありとて人さらに宿らぬ旧堂ありけり。さばかりの道中なる堂なれども、かく言ひ伝へて、人さらに寄らず。

しかる間、この三人の男、山を通る間に、夏ごろなりければ、俄にかき暗がりて夕立しなければ、今ややむやむと木の葉のしげき下に立ち入って待つに、さらにやまねば、日はただ暮れに暮れぬれば、一人ありて、<sup>②</sup>「いざ、あの堂に宿りなむ。」と言ひけるを、今二人ありて、「この堂は、

昔より鬼ありとて、人寄らぬ堂には、いかに。」と言ひければ、先づ宿らむと言ひつる男、「かかる序に、まことに鬼あらばさも知らむ。また食はれなば、いかがは死ぬましき。いたづら死せよかし。また狐、野猪などの、人たばかりむとしてしける事を、かく言ひ始めて言ひ伝へたるにもあらむ。」と言へば、二人の男は、なまじひに、「さうらば、さも。」と言ふに、日も暮れて暗くなりぬれば、この堂に入りて宿りぬ。<sup>③</sup>（『今昔物語集』）

\*1 下衆＝身分の低い人。

\*2 鬼あらばさも知らむ＝鬼が出るかどうか、はっきりと確かめてみよう。

\*3 また食はれなば……いたづら死せよかし＝人はいずれ死ぬのだから（鬼に食われることなど気にせず）思い切つて行動しようということを言っている。

\*4 人たばかりむとて＝人をたぶらかそうとして。

\*5 なまじひに＝しかたなく。

問一 ― 線①「若き男」は、どんな男たちですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 力が強く優しい。      イ 生意気で威張っている。  
ウ 勇ましく思慮深い。      エ 乱暴で考えが浅い。

問二 ― 線②「いざ、あの堂に宿りなむ」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) こう言ったのは、どんな考えがあつたからですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 夕立でぬれた体を乾かしたい。  
イ 人々のために何かの役に立ちたい。

ウ 長旅で疲れたのでゆっくり休みたい。  
エ 言い伝えが本当かどうかを確かめたい。

(2) こう言った男は、お堂にまつわる話をどのように考えていますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 言い伝えのとおり、本当に鬼がいるに違いない。  
イ よそ者をお堂に入れないための近隣の人々の作り話だろう。

ウ 村人が狐か野猪をたぶらかそうとして言い出したのに違いない。

エ 狐か野猪が人をたぶらかそうとしたことが言い伝えられたのではないか。

問三 ― 線③「いかに」には、二人のどんな気持ちが表示されていますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 同意      イ 興味  
ウ 焦り      エ ためらい

問四 結局三人はどうしたのですか。現代語で書きなさい。

## 2 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

近き頃<sup>ころ</sup>名人<sup>しやうじん</sup>と称<sup>しょう</sup>し、公より紫調<sup>むらさきしらべ</sup>賜<sup>たま</sup>はりし新九郎<sup>しんくわう</sup>こと、権九郎<sup>ごんくわう</sup>と言ひし頃<sup>ころ</sup>、日々鼓<sup>つづみ</sup>を出精<sup>しゆせい</sup>しけれどもいまだ心に落ちざる折<sup>おり</sup>から、年久<sup>ひさ</sup>しく召<sup>め</sup>し使<sup>つか</sup>ひし老女<sup>らうにょ</sup>朝々<sup>あさあ</sup>茶など持ち来たりて権九郎<sup>ごんくわう</sup>へ給仕<sup>きよつか</sup>しけるが、ある時申しけるは、主人<sup>しゆじん</sup>の鼓<sup>つづみ</sup>もはなはだ上達<sup>じやうたつ</sup>の由<sup>よし</sup>申しければ、権九郎<sup>ごんくわう</sup>もをかしきことと思ひて、女のこと常に鼓<sup>つづみ</sup>は聞けど手馴<sup>てな</sup>れしことにもあらず、我が職<sup>しやく</sup>分の上達<sup>じやうたつ</sup>を知るわけを尋ね笑ひければ、老女<sup>らうにょ</sup>答へて、我乱舞<sup>われらんぶ</sup>のこと知るべきやうなし。しかしながら親新九郎<sup>おやしんくわう</sup>鼓を数年聞きけるに、朝々<sup>あさあ</sup>煎ける茶釜<sup>ちやがま</sup>へ音ごとに響<sup>ひび</sup>き聞こえ侍る。これまで権九郎<sup>ごんくわう</sup>鼓はそのことこれなきところ、この四、五日は鼓の音ごとに茶釜<sup>ちやがま</sup>へ響<sup>ひび</sup>きけるゆゑ、さてこそ上達<sup>じやうたつ</sup>を知り侍ると答へけるとなり。年久<sup>ひさ</sup>しく耳馴<sup>みみな</sup>るれば自然と微妙<sup>びみょう</sup>に、よし悪<sup>あ</sup>しも分かるものと、権九郎<sup>ごんくわう</sup>も感じけるとなり。(根岸鎮衛<sup>ねぎしやすもり</sup>『耳囊<sup>みみでう</sup>』)

\*1公 幕府。

\*2紫調 調は音の調子を整えるために鼓につけてあるひものことで、

紫は高い格式を表す色である。

\*3新九郎 能の小鼓を受け持つ観世座の新九郎のことで、代々、こ

の名前を受け継いでいく。

\*4出精 精を出して励むこと。

\*5心に落ちざる 満足できない。

\*6朝々 毎朝。 \*7職分 鼓の技。 \*8乱舞 能。

\*9親新九郎 親である、前の代の新九郎の鼓。

\*10煎ける お湯をわかす。

問一 線①「主人」とは、だれのことですか。古文中から書き抜きなさい。

問二 線②「我が職分の上達を知るわけ」とありますが、老女はどんなことから権九郎の鼓の上達を知ったのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 鼓の音が茶釜に響くようになったこと。

イ 鼓の音が老女の部屋まで聞こえてくるようになったこと。

ウ 鼓の音が茶わんに響くようになったこと。

エ 鼓の音が茶室に響き渡るようになったこと。

問三 線③「老女答へて」とありますが、老女が語った内容を古文中から探し、その初めと終わりの四字を書き抜きなさい。

|  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|

問四 権九郎はどんなことに感じ入ったのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 長年その家に仕えている者は、当代の主人よりも物事がよくわかつているものだということ。

イ 第三者の方が当事者よりも、かえって物事の良し悪しがよくわかるものだということ。

ウ 素人でも、長年接している物事については、その良し悪しがわかるようになるということ。

エ 年寄りというものは、長年の経験で物事の微妙な違いまでわかっってしまうものだということ。